

## AA 研共同利用・共同研究課題

### 「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」

#### 平成 24 年度第 1 回研究会（通算第 4 回）

日時: 平成 24 年 7 月 20 日(金) 午後 2 時～午後 6 時, 7 月 21 日(土) 午前 10 時～午後 4 時

場所: AA 研 302 小会議室

## ■ 研究会プログラム

### 1 日目

【報告 1】 櫻田涼子 (AA 研共同研究員, 京都大学)

「甘いかおりと美しい記憶—マレーシア華人のコピティアムをめぐるノスタルジアについて」

【報告 2】 横田祥子 (AA 研共同研究員, 日本学術振興会／東京外国語大学)

「台湾 - インドネシア間のチャイニーズの国際結婚が形成するトランスナショナルな社会的場」

### 2 日目

【報告 3】 呉小安 (AA 研外国人研究員, 北京大学)

「「チャイニーズネス」の探求—概念化とパラダイム」

【報告 4】 北村由美 (AA 研共同研究員, 京都大学)

「「西」への道—オランダインドネシア華人のライフ・ヒストリー」

平成 24 年度第 1 回研究会(通算第 4 回目)として、2 日に分けて 3 名の共同研究員および 1 名の AA 研外国人研究員が、各自の研究に根差した事例報告を行なった。

1 日目の第 1 報告では櫻田が、マレーシアにおけるコーヒーショップ(*Kopitiam*)を介して人々がどのようなイメージと記憶(=懐かしさ)を紡ぎだしているかを、移住先のマレー半島、および故地とされる海南島でのフィールド調査に依拠しつつ、その来歴や伝統的なあり方、さらには近年展開している同対象をモチーフとしたチェーン店の実態などについて分析をした(⇒「報告 1」の要旨を参照)。

第 2 報告では横田が、台湾の男性とインドネシアの華人女性との間の国際結婚によって実現される社会的場について、送り出し側のインドネシア(特に西カリマンタン州シンカラ

ン市周辺)の歴史・社会的背景を紹介した上で、嫁を送り出した家庭に対する調査から、その属性や生存戦略などを具体的に明らかにした(⇒「報告 2」の要旨を参照)。

2 日目は第 3 報告と第 4 報告を行なった。まず第 3 報告では呉が、「チャイニーズネス(中国性/華人性)」という概念やイメージが、歴史的に西洋のまなざしをもとに形成され、それに対しディアスポラ華人や中国本土の側が応答してきた過程を批判的に示すとともに、同概念をめぐる問題系や近年の新たな展開を整理した(⇒「報告 3」の要旨を参照)。

第 4 報告の北村は、インドネシアを起点にして国際移動をした華人の視点を通して 20 世紀の東・東南アジア史を再考する試みの一環として、第二次大戦後に旧宗主国オランダに渡ったインドネシア華人(プラナカン)に対するインタビューの報告を行なった。報告の中では、移動した人々が「西」というものに抱いていた意味内容や、オランダ社会でのプラナカン意識の内実などについて紹介した(⇒「報告 4」の要旨を参照)。

今回の櫻田・横田・北村三氏の報告はいずれも、これまで各々が長年にわたる調査のすえ成果を上げてきた研究テーマ・対象をさらに発展させるべく、新たに開拓しつつある野心的なテーマに関する発表であった。また呉氏の報告も、人類学者がしばしば陥りがちな偏狭な視点を大きな文脈に位置づけ直してくれるような、歴史的視座に立ったものであり、議論が白熱した。こうした刺激的な場を共有できたことは、共同研究会企画者として望外の幸せであった。

今回の研究会をもって、当初は初年度内にすべて行なうとしていた共同研究員各自の事例報告が、一巡したことになる。総合討論においては、2 年度目の課題として、それぞれの事例報告を本共同研究課題の趣旨に沿ってブラッシュアップすべく、以下の点に留意して今後個々に再考してゆくことが確認された。

- ①「華人」(という意識を持っている人々)をア priori に想定するのではなく、行為中心のアプローチによって、いつどのような事象においてどのような人々がいかなる「華人」として立ち現れるのかを明らかにすることに主眼を置く。
- ②とりわけ、人々がどのような「記憶」を(再)生産し、またそれによってどのような「我々の広がり」を想像し、かつ実現しようとしているのかに注目し、その結果として立ち現われる「華人」なるものの多元的様相を明らかにする。

(文責: 津田)

---

## ■「報告 1」の要旨

「甘いかおりと美しい記憶—マレーシア華人のコピティアムをめぐるノスタルジアについて」

櫻田涼子 (AA 研共同研究員, 京都大学)

本報告では、マレーシアのコーヒーショップ、コピティアム(*Kopitiam*)をめぐる顕現するノスタルジア、あるいは懐かしさといったマレーシア華人の過去に対する認識と感情一般を考察対象とし、ある事柄に対し〈懐かしい〉という評価が下される時、そこでは一体どのような〈過去〉が想起されているのか、また、いかに過去と現在をつなぎ(あるいは断絶し)現在の我々を認識しているのかという問題を明らかにすることを試みた。

コピティアムとは、マレー語でコーヒーを意味する *kopi* と福建語で店を意味する *tiam* からなる語で、コーヒーや紅茶などの嗜好飲料と軽食を供する喫茶店のことを指す。19世紀後半以降、労働移民としてマレー半島に移り住んだ中国出身者のうち、海南出身者により営まれたコーヒーや軽食を提供する屋台や小さい飲食店がコピティアムの始まりともされる。早朝から深夜まで老若男女が飲食するコピティアムは、マレーシア華人社会における日常的場所であり、男性たちが政治談議に花を咲かせ交流する社交の場であるという意味において華人社会の重要な社会的空間として機能してきた。今日では、この伝統的コピティアムをモチーフとしてチェーン展開を図る近代的コピティアムが都市部を中心に急増している。

本報告では特に以下の3点を議論の材料として紹介した。

第1点として、移民社会におけるブリコラージュ的記憶の語り方を、シンガポールのドキュメンタリーフィルム『Old Places/老地方』(2010)を題材に考察した。フィルムに登場する人びとが語るレトロな場所、懐かしいという感覚はヒトにより千差万別であるが、語ることが新しい文脈で共有される〈過去〉を再現することを指摘した。

第2点として、マレー半島の珈琲文化・コピティアムの源流となるものが僑郷である中国海南に存在するかという点を短いフィールドワーク(2011年9月16~19日)で得られた知見から示した。珈琲を飲むという行為は確かに海南で確認されたが、珈琲や洋食の飲食は決して日常の実践ではなく、かえって茶の方が一般的に受け入れられていることが分かった。

第3点として、今日のマレーシアで急増する近代的コピティアムチェーン店について紹介した。6年足らずでマレーシア全土に200店舗以上のチェーン店を展開するまでに成長したある企業は店内に中国風のテーブルや椅子を配置し、マラヤ時代のセピア色の写真を飾り、また他のチェーン店では中国的ノスタルジアやイギリス的ノスタルジアを喚起するモチーフで店内を構成していた。つまり近代的コピティアムで表象される〈懐かしさ〉が多様な要素の寄せ集めであることを示した。

本報告に対し多くの示唆的なコメントと質問がなされたが、特に①想像される記憶の問題を議論する際にコピティアムを扱う意義はどう示せるのかという指摘と、②中国人にとって決して馴染みある飲料ではない珈琲がなぜ海南の特産物となったのかという歴史的経緯を明らかにすべきであり、どのように農作物として珈琲豆が海南に持ち込まれるようになったのかについても言及すべきであるという指摘、また③後発移民としてマラヤに移入した海南出身者についてもう少し丁寧に議論すべきという点は次回までの課題である。また④近代的コピティアムを利用する人びとは決してノスタルジアなどは求めておらず、冷

房の効いた快適な空間が欧米発のコーヒーチェーンより安価に利用できるという点に魅力を感じ利用しているに過ぎないのではないか。そこにノスタルジアを見いだすのは、研究者の恣意的視点なのではないかという指摘は、再考すべき重要な問題を明るみに出した。

しかしながら、本報告で提示した 3 点の材料を用いてマレーシア華人がどのように想像された時間感覚を持ちや故郷イメージを語るに至るのかという点を考察することは、本研究会の「多元的想像・動態的現実としての華人」という課題を議論する上で一つの重要な視点を提供しうると考える。

(文責: 櫻田)

---

## ■「報告 2」の要旨

### 「台湾 - インドネシア間のチャイニーズの国際結婚が形成するトランスナショナルな社会的場」

横田祥子 (AA 研共同研究員, 日本学術振興会 / 東京外国語大学)

本発表は、インドネシア共和国西カリマンタン州シンカワン市における、国際結婚配偶者の送付状況と家族戦略について、2011 年 8 月および 2012 年 1~2 月に実施した調査を元に報告した。

報告者は、従来台湾にて、婚姻仲介業者の斡旋を通じた国際結婚とその家族について調査を行ってきたが、台湾人の配偶者となったインドネシア出身女性の出身社会の状況を踏まえ、台湾 - インドネシア間に、国際結婚家族がいかなるトランスナショナルな場を形成しているのかを再構成する必要性を認め、当該地域での調査を開始した。

台湾における国際結婚配偶者は、1987 年から 2012 年 5 月までの累計で 465,053 人に上り、その 9 割以上が台湾人男性と外国人女性との組み合わせである。また、こうした結婚の多数が、婚姻仲介業者の斡旋を経て成立したものと推察される。国際結婚の女性配偶者の出身地・エスニシティは、年代および政治情勢により変遷しているが、インドネシア華人女性は最古参で、1970 年代末から今日に至るまで 30 年以上に渡り、依然として台湾へ移住し続けている。

今回言及したシンカワン市は、多数の華人女性を台湾、香港、マレーシア、シンガポールなどへ送付してきた。シンカワン市は、2009 年には 182,694 人の人口を擁し、その民族構成は約 40%を占める華人のほか、ダヤック人、マレー人からなる。華人のサブ・エスニシティは、客家系が多数を占め、一部潮州系、福建系もみられる。

本発表では、シンカワン市 S 村の中から、A 隣組の 3 つの家族を取り上げて紹介した。A 隣組は、1967 年にマラヤ共産党の掃討作戦の一環で生じた、華人追放事件の難民キャンプを母体にしており、難民から定住化の過程で、経済的上昇の一手段として国際結婚を行う必要性が生じたと仮定し、調査を実施した。3 つの事例を通じて、(a) 成員の属性(学歴、職

業、現在の居住地、結婚相手のエスニシティ)、(b)居住形態と経済、(c)国際結婚に関しての家族戦略、について言及し、①年長の娘から国際結婚をしていく、②国際結婚に限らず、娘・息子たちが海外出稼ぎ、国内出稼ぎをし、外地へ移住している、③第②点にもかかわらず、国際結婚をした娘(たち)が長期に渡り、主要な家計負担者となっている、といった共通点を導き出した。

発表に対し、参加者から以下のような質問およびコメントが寄せられた。第一に、ミクロ・レベルの分析に関して、「国際結婚をした女性個々人の動機、恋愛観、結婚観、職業観はいかなるものであったのか」、「家族の内の誰が、国際結婚を決定したのか」という質問を受けた。動機については、家族は家計のためであると認識している一方、本人は「性格がお転婆だったから、外の世界を見てみたかった」、「親に恋愛を反対され、その反抗心から国際結婚をした」というように、家族のために犠牲となったというよりは、自己実現を動機に挙げている。また、当地の華人の間では、自由恋愛が一般的であり、広くロマンチックラブ・イデオロギーが受容されている。国際結婚は、恋愛を経ない結婚であるものの、当事者はロマンチックラブ・イデオロギウムを用いて自らの結婚を表現しており、「家族の犠牲のため」の封建的な結婚をしたと看做されることを拒否していると思われる。また、結婚観、職業観については、当地では、女性は結婚し主婦業に就くものであるという考えが強く、女性が勉学を続け、専門的知識・技術を必要とする職業に就くことは重視されていない。そこで、国際結婚はよりよい条件の相手と結婚するための選択肢として捉えられている。そして、国際結婚の決定については、最終的には本人が決定しているとみられるが、決定に至るまでの過程においては、家族や隣人、仲介業者からの働きかけが積み重なっていると推察される。

第二に、エスニシティに関して、「近隣の大都市ポンティアナックの華人との結婚と、国際結婚を比較した場合、前者はどのように考えられているのか」、「先住民ダヤック人と華人が通婚した場合、『華人性』はどのように保たれるのか」という質問を受けた。シンカワン華人女性と、ポンティアナックの潮州系華人との結婚は、しばしば行われているが、台湾人との結婚のように劇的な経済上昇をもたらすものとして、比較対照の上、選択されているわけではなさそうである。また、ダヤック人女性と華人男性が通婚した場合、その子は「完全なる華人」として周囲から認められている。

第三に、「海外へ移住した女性が送金を通じて築き上げた財産は、誰が継承するのか」という質問を受けた。現時点では、当地の財産分与の規則性が見いだせず、またこうした事態について留意してこなかったため、今後の調査の課題としたい。

第四に、「インドネシア華人女性の台湾での評判はどうか」という質問を受けた。インドネシア華人女性については、人口最多の中国大陸出身女性や1990年代後半、急増しているベトナム人女性ほど取りざたされておらず、台湾社会が何らかのステレオタイプを作り上げているとは言い難い。「中国人性」を共有し、場合によっては「客家人性」をも共有できる彼女たちは、他国出身者に比べて親近感を持たれていると思われる。

今後の課題として、今回頂いた質問内容についてさらに検討することに加え、国際結婚の戦略を集団、家族ないし世帯、個人のレベルに分けて考察すること、30年以上、国際結婚が継続してきた政治的、歴史的、経済的背景を年代別に検討することを挙げておきたい。そして、今後も台湾 - インドネシア間にて、長期にわたる調査を通じて、台湾側の家族とインドネシア側家族が形成している、トランスナショナルな社会的場を再構成していく予定である。

(文責: 横田)

---

### ■「報告 3」の要旨

#### “In Search of Chineseness: Conceptualization and Paradigms”

Wu Xiao An (AA 研外国人研究員, 北京大学)

Chineseness is both an old and a new term to signify the identity of “being Chinese”. Although the term has been used for long time, it is only two decades ago that the term started to become popular among overseas scholarship on China and Chinese. The idea of ‘Chineseness’ has a different history in the West and in China, but in both places it has been shaped by both the wider political, economic and cultural context, and by the specific geographic and social location of interlocutors. Various definitions of “Chineseness” are usually correlated to and intertwined with different paradigms and approaches. The Chineseness discourse is, first of all, not specifically a Chinese phenomenon, but belongs to a wider global post-modern culturalist project on identity politics. Literature on Chineseness discourse could be divided into two categories in general. The China-focused literature is that of predominantly the West first, the one that China itself responds to the West, and that residual China mediates in between Mainland China and outside world. The Chinese-focused literature is of predominantly Western popular media and diasporic Chinese first, then the one that domestic Chinese self-reflection and response to diasporic Chinese. It is a constellation, contestation, and even confrontation between China and the West, Mainland China and Residual China, domestic Chinese and diasporic Chinese. The controversial critique highlights the structural difference of how the West and China organize their societies and governments, and manage state-society relationships culturally as well as institutionally. The case of Chineseness offers us the chance to explore the tension between essentialist and constructivist views of identity.

This paper will tackle the issue from the eight aspects as follows: 1) Concept and Conception; 2) Constellation and Contestation; 3) Past and Present; 4) Perception and

Representation; 5) Paradigms and Approaches; 6) Sinicization and Re-sinicization; 7) China Southern as Dynamics; 8) Another Kind of Chineseness.

(文責: 呉)

---

## ■「報告 4」の要旨

### 「西」への道—オランダインドネシア華人のライフ・ヒストリー—

北村由美 (AA 研共同研究員, 京都大学)

本報告では、インドネシア華人の国際移動に関する概要を説明した後、2011 年度に報告者が調査したオランダ在住のインドネシア華人のライフ・ヒストリーから事例紹介を行った。

インドネシア華人の移動は、第二次世界大戦後日本から北朝鮮への帰国事業と並んで、戦後アジアにおける最大規模の国際移動である。インドネシアからは、1960 年前後の中華人民共和国に約 9 万 4000 人が移動(帰国)した時期を頂点に、中国、台湾、香港、シンガポール、オランダ、アメリカ、オーストラリアなどに向かって、華人の国際移動が続いている。このようなインドネシア華人の移動の背景には、第二次世界大戦後、植民地体制→左翼ポピュリズムによる容共権威主義体制→軍部主導の反共権威主義体制→民主主義体制、という劇的な体制転換に代表されるインドネシアの政治状況と、複雑に絡み合ったアジアの国際関係がある。

これらのインドネシア華人の移動の全貌に関しては、報告者が代表を務める科学研究費による共同研究によって明らかにする予定だが、本報告では、特にオランダに移動したインドネシア華人に関して紹介した。オランダに移動したインドネシア華人に関しては、これまで中間層以上を対象にした研究がわずかに見られるのみである。このような先行研究から浮かび上がってくるオランダ在住のインドネシア華人の印象は、オランダ語の素養が高く、医者や薬剤師など特定の職業につき、問題の少ない移民グループといった、個人の人生や両国における政治的・社会的背景が感じられない平板なものである。

本報告では、第二次世界大戦後すぐの脱植民地期から、1965 年に成立したスハルト体制初期にかけてオランダに移動したインドネシア華人のライフ・ヒストリーを、移動年代別に分け、合計 6 事例を紹介した。うち 1940 年代の 2 事例と 1950 年代の 1 事例は、これまで先行研究の対象となってきた層に属し、オランダ語能力を文化資本として、留学し、現地でプロフェッショナルとして定住したインフォーマントの事例であった。一方で、1950 年代のもう一つの事例は、インドネシア独立戦争後にオランダに退避する、オランダ人やオランダ軍従事者とともに「帰国船」によって移動したケースで、移動年代が同じでも全く違った両国の状況が浮かび上がってきた。また 1960 年代の 2 事例は、どちらもスハルト政権成立直後の共産党関係者弾圧事件の影響を受け、最終的にオランダを目指した人々である

が、一人はオランダ領のキュラソー経由で、一人は留学先であった中国から辿り着き、当時の世界情勢が個人の人生に集約されている例であった。

報告後の質疑応答では、「比較の対象として、オランダに帰国したオランダ系混血児や、韓国からアメリカに養子として渡った移民が考えられるのではないだろうか」といった提案や、「在オランダインドネシア華人の中で、次世代への文化の継承はなされているのか」という質問、またそれと関連して「食生活をめぐって、インドネシア性或華人性が担保されているのでは」といったコメントを頂いた。いずれも今後研究を進めていく上で大変参考になる知見を得られた。

(文責: 北村)